

Publisher's Review

パブリッシャーズ・レビュー

● 東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙 ●



みすず書房の本棚

[無料送付]

No.6 2013 春

(表示価格は消費税込です)

113-0033 東京都文京区本郷 5-32-21 tel. 03-3814-0131 http://www.msz.co.jp

「ネットワーク・インテリジェンス」で 社会をデザインできるか

瀬名秀明



著者(右端)と共同研究者たち
MITメディアラボにて

本書の『正直シグナル (Honest Signals)』というタイトルをばつと見たとき、どのように思われるだろうか。近年はマルコム・グラッドウエルの『第1感 (Brain)』やダン・アリエリーの『予想どおりに不合理 (Predictably Irrational)』など、見逃されがちな現象をうまいキャッチフレーズに落とし込んで多くの読者をつかむ本が次々と出ている。その点「正直シグナル」は以前から生物学分野で使われていた用語だろうが、ちよつとわかりにくい。正直者が発するサインのことなのか、見た目通りに受け取ってこれという合図のことなのか、言葉を見ただけでは想像しにくい。

正直シグナルとはその人の真意を相手に伝える社会的シグナルのことだ。これまで人と人のコミュニケーションは、ふたつの枠組みで捉えられてきた。ひとつは顔の表情や声の「場の空気」や「暗黙の了解」、「あうんの呼吸」など、言葉にされないさまざまなコードを、私たちは息苦しいほど意識しながら生活している。もしそうした「雰囲気」のやりとりが露わになったら、どうだろうか。きつと喜劇的なほどあられもない、ホンネの応酬になつていくにちがいない。もし暗黙のやりとりが、未来のテクノロジーによって丸見えになつてしまつたらどうだろうか?

本書の著者ペントランドは、ほんとうにそんなテクノロジーを開発してしまつた。「ソシオメーター」はそれを身につけている人物が発する「正直シグナル」を測定する。「正直シグナル」とは、私たちが普段(相手の「雰囲気」として察知し、やりとりしているシグナル)のことで、現

調子といったディスプレイ行動。もうひとつは声色や声の大きさなどの言語情報である。本書の著者、マサチューセッツ工科大学メディアラボのアレックス・ペントランド教授は工学的な第三の方法を導入する。ある集団にソシオメーターなる端末器を長期携帯してもらい、いつどこにいたか、誰が誰とのくらい対面していたか、どんな体の動きをしたか、誰と通信したかなどのデータを取得して社会的なふるまいを解析し、当事者でさえ無意識な「正直シグナル」を手がかりに、人と人がどのように影響し合うかを調べたのである。

ところでここ数年、私はコミュニケーションの可視化技術がいかに未来を創るかといったお話をSFでよく書いている。人間の「共感」や「感情移入」の度合いが定性定量できるようになつたらどうなるか。社会の

在の電子機器の性能とコンピューティング能力をもつてすれば、それを定量的に測定して、科学的に解析することができるといふ。

本書は、明示的でない意思伝達の領域に初めて科学のメスを入れたペントランドの研究成果とビジョンを覗きこむ。正直シグナルが可視化される未来の社会では、「ネットワーク・インテリジェンス」(人間の集合

が一つの頭脳のように形づくるといふ)が、はるかに効率的に利用されるはずだと著者は語る。他方、こうしたテクノロジーは未来への新たな危険も生む。高度なプライバシーを含む正直シグナルのデータを、社会権力や犯罪組織が都合よく利用しはじめたらどうなるのだろうか?

ペントランドの研究も含め、現代の計算能力を駆使する「計算社会科学」が、認知・情報科学分野でますます注目を集めている。私たちはどんな未来を求めているのか。それを幅広い視点で考えるためにも、MITメディアラボという情報科学のメッソで行われている研究の水準を、いま目の当たりにしておきたい。

賢い社会とはなんだろうか? 未来のデバイスで社会的ネットワークが可視化されるようになったとき、本当に組織はよくなるのか? 社会はデザインできるのか。著者が今回書き下ろした終盤の考察は新しい科学と物語の芽を見せてくれる。安西祐一郎の長文の解説も素晴らしい。この日本版で科学論文は書物となつた。(せな・ひであき 作家)



「正直シグナル」を測定するソシオメーター

「認知科学・情報科学」(三月下旬刊) (四六判・248頁・予価二六二五円)

▽『パブリッシャーズ・レビュー』は、東京大学出版会、白水社、みすず書房の三社が発行する無料のタブロイド判出版情報紙です。▽ご送付先の変更のさいは、お名前住所・旧住所と、お届けしました本紙の帯封コードをお知らせ下さい

最新「繋がり」の科学 MITメディアラボからの報告

アレックス・ペントランド

《正直シグナル 非言語コミュニケーションの科学》
柴田裕之訳 安西祐一郎監訳

東日本大震災で東北・常磐の漁業集落は壊滅的な状態となった。リアス式海岸が入り組み、浦々で多様な漁業・養殖業が営まれてきた三陸。遠浅の海が広がる常磐。漁港はほぼ全滅し、残った漁船は一割。被害総額は前年度の国内漁業生産額に近かった。

経済一辺倒社会に「人のなりわい」をとり戻す

濱田武士
《漁業と震災》



立がつきもの漁場を、「自治・参加・責任」の精神で共同管理する漁協は、日本で最も協同組合らしい組織と言われてきた。

高齢化、TPP交渉、魚資源の減少、輸入水産物との競合、魚消費の低迷、放射能汚染。漁業は危機に瀕している。生産活動を行いつつ自然を守ってきた漁業集落が壊れれば、国土は荒れるだろう。かつて木材の輸入自由化・関税撤廃で林業が衰退し、山林が荒れたように。

多様な個性を備えた暮らす人、働く人の「人格」の復興がなければ地域の再生はありえず、成熟した社会としての安定はない。

本書は被災地の漁業とその変遷、震災後の経過を描きながら、経済一辺倒の格差社会に抗い、「人のなりわい」をとり戻すためにはどうしたらよいか、漁業経済学者が考え抜いた。漁業から日本が見えてくる。「社会・経済」(四六判・320頁・三二五〇円)

著者はアポロ月面着陸の宇宙中継や大阪万博など、同時通訳の先駆者として数々の国際舞台で活躍してきた。また、「百万人の英語」はじめ英語教育番組で数多くのファンがいる。後年、通訳学・翻訳学を日本で樹立し現在はNHK「ニュースで英会話」監修・講師と八面六臂である。本書では、その舞台裏が語られる。初めて語られるエピソードの数々―チャレンジ精神、教育現場での葛藤、決意の瞬間など、強く引き込まれる。

同時通訳から英語教育へ

鳥飼玖美子 《戦後史の中の英語と私》



鳥飼玖美子

専門の職業世界で苦闘する生き方が、読者に響くだろう。新たな専門性の切り拓き方、挑戦への意志や方法が説得力に富む、現在までの歩みをたどり、

著者はアポロ月面着陸の宇宙中継や大阪万博など、同時通訳の先駆者として数々の国際舞台で活躍してきた。また、「百万人の英語」はじめ英語教育番組で数多くのファンがいる。後年、通訳学・翻訳学を日本で樹立し現在はNHK「ニュースで英会話」監修・講師と八面六臂である。本書では、その舞台裏が語られる。初めて語られるエピソードの数々―チャレンジ精神、教育現場での葛藤、決意の瞬間など、強く引き込まれる。

翻訳報道のどこで偏向が生じたか

坪井睦子 《ボスニア紛争報道》

ボスニア紛争における報道を詳細に分析し、問題点を浮き彫りにした重要作。現地報道は社会的文化的多様性をフオリしたものであったが、欧米主要メディアを介して報道された時点で、選択と解釈によって偏向していた。

本書では、現地の正確な情報が、英語、日本語に翻訳報道され、変換されていった過程の問題点とその原因を論じ、

サイエンスカフェ名講義

多田隆浩 《気候変動を理學する》

古気候学が変える地球環境観

サイエンスカフェをご存知だろうか。街なかの、喫茶店のような気の置けない場に科学の専門家と市民が集い、科学的テーマについて議論するイベントのこと。近年は日本でもこうした形式は少なくない。サイエンスカフェが各地で催されるようになった。

本書は古気候学者と市民のコラボレーションで生まれたサイエンスカフェの名講義を書籍化したもの。参加する市民の学びへの熱意を支えられた、この質の高いレクチャーをぜひ覗いてみてほしい。

古気候学とは、堆積物や氷床などに残る痕跡を手がかりに気候変動の歴史を復元し、地球環境を造形している大規模なメカニズムの数々を明らかにする学問だ。その最近二十年あまりの成果が、地球の

裕仁親王と宮中某重大事件ほか

黒沢文貴 《大戦間期の宮中と政治家》

本書が考察の対象にするのは第一次大戦後の世界である。それまでの国際社会を律してきた原理原則が大きな転換を迫られるとともに、国内の体制にもそれに見合う変革が求められた時代、大正デモクラシーから昭和ファシズムへの時期にあたる。この大きな変動のなか、政治家、官僚、軍人、国家主義者、そして天皇や元老、側近奉仕者たちは、何を感ぜ、どのように考え、活動していたのだろうか。

本書は幣原外交の時代―

書評コラム

『みすず』読書アンケートより

月刊『みすず』一・二月合併号では毎年「読書アンケート」特集を組み、ご好評をいただいています(本面に紹介)。今年158名のご回答のなかから小社の刊行書へのコメントをいくつかご紹介いたします(敬称略)。

■グロスマン『人生と運命』全三巻 齋藤紘一 訳 全体主義の暴力が猖獗をきわめた二十世紀という時代に生まれ落ちた人間の運命について読む者を深い沈思へと引きこむ(上村忠男)

他に渡邊一民 阿部日奈子、山口二郎) ■『サイード音楽評論』全二巻 二木麻里 訳 ワグナー

の反ユダヤ主義に対する何重にも屈折した思索(免罪符つきの有罪宣告)はアドルノの場合と同じく音楽批評の極限を示していると思ふ(細川周平、他に柿沼敏江) ■ラートカウ『自然と権力』海老根・森田 訳 文明/自然というありがちなロマンチックな図式を解きほぐし、重層的に展開される自然に関する比較文化・政治思想史(野口雅弘、他に陸山宏) ■アノニマス『知らぬ間に』菅野有美 訳 無料貸本屋とする非難はパブリック・リーディングの習慣のない非プロテスタント圏のヨーロッパも同じで、いま必要なのは多様なコミュニケーションを受け容れる

知の広場である(宮田昇、他に根本彰) ■プランケンブルク『目立たぬもの』精神病理 木村・生田 監訳 現存在分析と現象学を踏まえた高度な理論化と極限まで研ぎすまされた臨床的な完成の出会い(廣瀬浩司、他に戸川幸司) ■他にエウレット『ヒタハン』(服部文祥、花崎卓平) 岡野八代『フェミニズムの政治学』(上野千鶴子、宇野重規) パトナム『解離』(宮地尚子、保坂和志) グラムシ『知識人と権力』(鈴木了二) 坂上香『ライファーズ』(岡野八代) 柘植あづみ『生殖技術』(立岩真也) ジュネ『判決』(松本潤一郎) 田中純『冥府の建築家』(鈴木了二)等。

二〇一二年読書アンケート特集 藤井省三/川口喬一/佐々木力/外岡秀俊/岡田秀則/佐藤文隆/小西正捷/郷原佳以/榎木伸明/最上敏樹/市野川容孝/道場親信/宮下士朗/大井玄/五十嵐太郎/千田善/竹内洋/柘植あづみ/坂上香/加藤幹郎/今福龍太/大野英士/最相葉月/川端康雄/三島憲一/福島聡/飯田隆/姜信子/生井英考/坂内徳明/早川尚男/桑野隆/大谷卓史/廣瀬浩司/川那部浩哉/三原弟平/澤田直/増田耕一/宇野邦一/山根貞男/鈴木一誌/平尾隆弘(一・二月号) ヒーリー&レイン『双極性障害とそのバイオミソロジー』/酒井啓子、連載は中村健之介、山本太郎、辻由美、野口良平、保坂和志ほか(三月号)。(各三二五〇円)

『大戦間期の宮中と政治家』(四六判・368頁・四二〇〇円)

『貧乏人の経済学』(四六判・315頁・三二五〇円)

『最底辺のポートフォリオ』(四六判・399頁・三九九〇円)

開発経済の三部作、登場

5年前、かりに「開発経済学一般向け入門書は？」と問われればサクセス『貧困の終焉』、イースタリー『エコノミスト南の貧困と闘う』、コリアー『最底辺の10億人』の3冊を挙げたろう(…)。これら旧三部作にとって替わったのが、地べたを這いつくばるような臨場感にあふれつつ「クール」な議論を次々と展開する新三部作である。(澤田康幸『善意で…』解説より)

最新刊
D・カーラン/J・アベル
善意で貧困はなくせるのか?
貧乏人の行動経済学
澤田康幸解説 清川幸美訳 3150円

A・V・バナジー/E・デュフロ 山形浩生訳
貧乏人の経済学
もういちど貧困問題を根っから考える 3150円
食糧、医療、教育、家族、マイクロ融資、貯蓄……世界の貧困問題をサイエンスする新・経済学。Financial Times, Goldmann Sachsベストビジネス書賞受賞(2011年)。

モーダック/ラザフォード他 野上裕生監修 大川修二訳
最底辺のポートフォリオ
1日2ドルで暮らすということ 3990円
聴き取り調査でつぶさに明らかになったマイクロファイナンスの実態。貧困からの離陸のための新たな道筋。

ツムトア氏ディレクション 日本語版オリジナル 大好評 限定300部

ペーター・ツムトア 鈴木仁子 訳

『建築を考える』 [特装版] 15750円

この本があって救われる人は多いと思う。
—深澤直人(工業デザイナー)

類稀なる建築空間を生み出してきたスイスの巨匠ツムトア、初エッセイ集。

◇ブックデザイン: 葛西薫
◇表紙テキスト: 須藤玲子(NUNO)
◇奈良の古式織機で織られた表紙クロス
◇特別付録: ツムトアの建築ドローイング(コロタイプ、約210mm×370mm)
◇ボール紙のケースに収めてお届けします
(本文は先に刊行した通常版と同内容です)

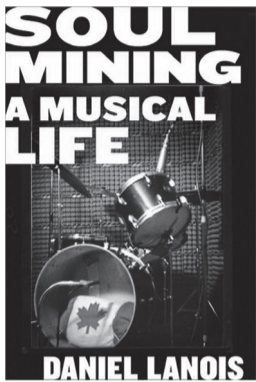
Drawing for Therme Vals
©Atelier Peter Zumthor & Partner

ボブ・ディラン自伝に、ユー・オリオンズで『オー・マシー』を作った時の印象深い挿話がある。劇的なカムバックを遂げ、その後の二十年のきつかけになったこのアルバムを制作したのが本書の著者である。カナダ出身の音楽プロデューサー、シンガー、ライター、ギタリスト、レコーディングエンジニアのラノワが、子ども時代の話に始まり、数々のレコード作品の制作経験、録音の手法について書き下ろした自伝だ。

十七歳で自宅地下室にスタジオを兄と作り上げ大量のレコードを作ったラノワは、噂を聞きつけて訪ねてきたブライアン・イノと運命的な出会いを果たす。その後U2『焔』の共同プロデューサーを皮切りに、ネヴィル・ブラザーズやロビー・ロバートソン、エミルー・ハリス、ウイリー・ネルソンやニール・ヤングらのアルバムを制作し、グラミー賞など高い評価を得た。そ

名音楽プロデューサーの静かな狂熱

ダニエル・ラノワ
《ソウル・マイニング 音楽的自伝》
鈴木コウユウ訳



の秘訣とは何か？
楽器の奏法と録音テクニック、屋敷や映画館をスタジオに改造してしまうマジック。最新機材とロックンロール初期の熱を帯びたアナログ機材を導入する、独特のセンス。人気ミュージシャンの自伝とは異なり、几帳面な性格、繊細な感覚、激しいロック感が共存する本書の記述は、来日ステージで見たヴァイブに通じる。彼の静かな哲学は、スターたちにも与えたであろう影響を著者にもたらして、音楽はもろろん、何かを作りだすどんな仕事にも、きつとヒントになるだろう。

「音楽・自伝」【三月下旬刊】
(四六三頁・予価三九〇〇円)

大人の本棚

野見山晴治
《遠くさがる景色》

一九八二年に初版が刊行された本書には、九十二歳の今なお旺盛な創作活動が続ける画家／エッセイストの遙かな歩みが刻まれている。復員後に単身渡欧し、パリの空気を吸い込んだ画家のエスプリが香気を放っている。

美校時代、故郷の山中をさまよって歩いた幻想的短篇小説風の「夜道」をはじめ、アトリエを建てた苦勞譚、どこまでもエキセントリックな義弟田中小実昌、銀幕のスターやシャンソン歌手への憧憬、そして戦後画学生時代の遺族を訪ね歩いた「ある鎮魂の旅」など

追憶の全十九篇。

「エッセイ・美術」
(四六判・272頁・二九四〇円)

田中眞澄 稲川方人解説
《本読みの獣道》

子鹿のバンビはどこへ行ったのか。『君たちはどう生きるか』をどう生きるのか。『ゴタン』の口笛『飛ぶ教室』ほか一九五〇年代児童書の再読から戦後精神の原点を問う。おす「いつか来た道」とおりやんせ、近代文学を手がかりに失われゆく世相・文化を

あざやかに捉えたエッセイ・クリティック「一切切切みな煙」、ネット社会に背を向けた超アナログ読書術にして日々糧「ふるほん行脚」。小津

旧知の作家と批評家による素顔

若江漢字
酒井忠康
《ヨーゼフ・ボイスの足型》



前衛芸術家ヨーゼフ・ボイス(一九二一―八六)の作品コレクターであり現代美術家の若江漢字は、八二年にドイツのボイス自宅を訪問、石膏で足型をとることに成功した。この秀逸なエピソードを中核に、これまでに書いたボイス論や初来日の行動記録などを前半部に据える。後半部は、若江とボイスとの交流に声援を送ってきた美術評論家・酒井忠康によるボイス／若江論、両氏による対談を収録する。

ボイスはその破天荒なパフォーマンスや「緑の党」結成といったラディカルな活動から、ポストモダンに沸く八〇年代日本において耳目を集めたが、以前から熱い視線

を注いできた若江氏のボイス論は、当時の高揚した空気を伝えつつも、余人には知りえないボイスの素顔を細やかに彫琢しており、針生一郎や中沢新一をはじめとするボイス受容とは一線を画している。若江が主宰する横須賀「カサヤの森現代美術館」に収蔵するボイス作品写真も多数掲載。旧知の作家と批評家によるボイスをめぐるコラボレーション。

「現代美術」【四月上旬刊】
(A5 224頁・予価四四一〇円)

「全集」未収録の福沢書翰ほか808通

早稲田大学文学部
資料センター編
《大隈重信関係文書9》

大隈重信に宛てた書翰六千通あまりを翻刻・編纂し、公開するシリーズの第九巻。

本巻には、鳩山由紀夫の曾祖父にあたる鳩山和夫の書翰通にはじまり、「全集」未収録のものも含む福沢諭吉の書翰22通、福地源一郎や穂積陳重、前島密74通、牧野伸顕、

益田孝、さらに松方正義が大隈に宛てた99通におよぶ書翰を収録。日本近代史の重要局面への貴重なものから、当時の文化・生活を知るための書翰まで、一九八名・八〇八通を収録する。全11巻。

「近代史・政治」
(A5判・486頁・二二六〇〇円)

全章に加筆、安倍政権誕生まで

アンドルー・ゴードン
森谷文昭訳
徳川時代から現代まで 全二巻



A・ゴードン

日本の進路は、内外ともに混乱を極める。そんなとき、山積する問題を、アジアの歴史のなかで、さらにはグローバルな近現代史のなかでどう位置づけるかが、理解の糸口となりそう。しかも、明治維新を留意した徳川時代末の胎動にまで視野を広げ、長期的な理解がもたらされる。

本書はこの要請にびたりだろ。政治、経済、社会、教育から女性問題までダイナミックに、体系的に物語る。

旧版の全章に加筆してアジアの視点を掘り下げ、さらに新しい一章では、リーマンショック、東日本大震災、最近の政治の激動までをフォローする。著者はとくに震災については、ハーバード大学を起点に、膨大なネット情報を統合する事業に携わっている。政治家もビジネスマンも学生も、およそ日本の将来に関心あるすべての人に、良質な歴史書の説得力と躍動感を味わってほしい。英語圏では日本について学ぶ学生たちが広く授業で読み、版を重ねている。図版・写真多数。

「日本史」【四月上旬刊】
(四六判・上424頁・下440頁・予価各三三六〇円)

みすず書房 営業部だより

一 フランクル『夜と霧』をとりあげたNHK・Eテレ「100分de名著」がこの三月アンコール放送されています。著者自身の生涯に興味をひかれた方には、小社刊『人生があなたを待っている』(全2巻)がお奨めです。感動的な回顧録です。ぜひ一読下さい。

一 「始まりの本」シリーズかねてご案内のE・H・カー『ロシア革命の考察』が四月上旬いよいよ刊行となり、既刊21点に。今後もご期待下さい。

一 三面「書評コラム」ご紹介の雑誌『みすず』読書アンケート特集号(二〇一三年一月)は、二月合併号を希望の方は、切手四〇〇円分(誌代・送料込)を、号数明記の上お送り下さい。折返し発送します。

みすず書房 近刊のお知らせ

4~6月の刊行予定のなかからいくつか選んでご紹介します

- 四つの小さなパン切れ
マグダ・オランダール＝ラフォン 高橋啓訳
 - さまよう魂がよみがえるとき
フランソワ・チェン 辻由美訳
 - アーツ・アンド・クラフツ運動
ジリアン・ネイラー 川端康雄・菅靖子訳
 - ニューメディアの言語
レフ・マノヴィッチ 堀潤之訳
 - 歴史学の未来
ジョン・ルカーチ 村井章子訳
 - 化石の意味
M.J.S.ラドウィック 菅谷暁他訳
 - 図書館に通う
宮田昇
 - 消えた国 追われた人々 東プロシアの旅
池内紀
 - 映像の歴史哲学
多木浩二 今福龍太編
 - 「全体の科学」のために
笠原嘉臨床論集
 - アーレントユダヤ論集成 1・2
大島かおり他訳
- (ウェブサイトにもご案内 http://www.mszo.jp)

みすず書房・最近の重版より

- 野生の思考
C.レヴィニストロース 大橋保夫訳 ¥5040
- 1968年―反乱のグローバリズム
N.フライ 下村由一訳 ¥3780
- 夜と霧―ドイツ強制収容所の体験記録
V.E.フランクル 霜山徳爾訳 ¥1890
- 死と愛―実存分析入門
V.E.フランクル 霜山徳爾訳 ¥2730
- 不平等について―経済学と統計が語る26の話
B.ミラノヴィッチ 村上彩訳 ¥3150
- フランス革命の省察
E.パーク 半澤孝廣訳 ¥3675
- 落語の国の精神分析
藤山直樹 ¥2730
- チョコレート帝国
J.G.ブレナー 室玲子訳 ¥3990
- 建築を考える
P.ツムトア 鈴木仁子訳 ¥3360
- ゲーデルの定理―利用と誤用の不完全ガイド
T.フランセー 田中一之訳 ¥3675